

陸軍登戸研究所上映会

—楠山忠之監督を迎えて



2014年3月1日(土)

立命館大学衣笠キャンパス
充光館301(定員170名)

参加費無料
事前申し込み不要

【企画趣旨】

戦後70年がたとうとしているいま、日本社会はどうであろうとし、どこに向かおうとしているのでしょうか。

このドキュメンタリーは、戦時下秘密戦に関わる科学技術を研究・開発していた陸軍登戸研究所に動員された様々な人のインタビューを通じ、過去の戦争の姿と当時の総動員体制の一端を浮き彫りにするものです。登戸研究所では科学者・技術者だけでなく学生や地域住民も動員されました。

インタビュアーによって、研究所の活動を語りたがらない方、所内の牧歌的な日常を語る方、風船爆弾製造の苦勞を語る方など様々な語りや当時を引き受ける姿が引き出されています。この映画は動員された人々がどのように生き抜いたのか、生きざるをえなかったのか、戦時下の総動員体制、科学技術と戦争、戦争の加害と被害について、現代の私たちに改めて考えさせます。

映画上映の後は楠山忠之監督にお話しと監督を交えたディスカッションを予定しています。この企画が戦時中の日本の歴史を振り返り、今後の日本社会を考えるよい契機になればと考えています。

【上映作品情報】

戦前、極秘に進められていた防諜、謀略、秘密兵器の開発の拠点だった陸軍登戸研究所は、敗戦を迎え「証拠湮滅」の命令が下されて歴史から消えました。しかし、今日、当時の関係者が、そこで何が行われ作られていたかをようやく語り始め、殺人光線、生体実験への道、毒物・爆薬の研究、風船爆弾、生物・化学兵器、二セ札製造と多岐にわたる研究の実態が明らかになりました。その成果は、陸軍中野学校を通じて果たされたものも多くありました。それぞれに携わった研究員、作業員、風船爆弾の製造の一翼を担わされた当時の女学生たち、陸軍中野学校OB、その他今聞いておかなければ抹消されてしまう歴史を、勇気ある証言者たちがカメラの前に立ち、語った映像を6年以上の歳月をかけて追いつけた渾身のドキュメンタリーがこの「陸軍登戸研究所」です。

【楠山忠之監督プロフィール】

1939年東京生まれ。上智大学文学部卒業後、報知新聞社写真部を経て、69年にフリーとして独立。沖縄復帰およびベトナム戦争最後の「サイゴン解放」を「現場」から報道。国内およびアジアに視点を据えて「写真と文」あるいは映画製作で現地の声を伝えてきた。現在、文化学院講師。

主な著書に「おばあちゃん 泣いてシャッターをきる」(ポプラ社)、「日本のいちばん南にあるぜいたく」(情報センター出版局)、「結局、アメリカの患部ばかり撮っていた」(三五館)など多数。記録映画としては『メコンに銃声が消える日』『三里塚—この大地に生きる』『アフガニスタン戦争被害調査』などがある。(「陸軍登戸研究所」HPより)

プログラム

2014年3月1日(土)

12:30~ 開場

13:00~13:10 挨拶・司会：川端美季

13:10~16:10 上映

16:10~16:30 休憩

16:30~17:00 楠山忠之監督講演

17:00~18:00 質疑応答とディスカッション

主催：立命館大学生存学研究センター

共催：立命館大学人間科学研究所

本企画は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」(チーム：社会的包摂と支援に関する基礎的研究)の研究成果の一部を社会に発信するものです。

お問い合わせ先：立命館大学生存学研究センター事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL: 075-465-8475 FAX: 075-465-8245

E-mail: ars-vive@st.ritsumei.ac.jp

※駐車スペースがございませんので、ご来場の際は公共交通機関をご利用ください。